

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）大学院学生研究2017年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	教育学専攻
研究代表者 (2018年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年 文学研究科教育学専攻 博士課程前期課程2年	氏名 井出大輝	印
指導教員	所属・職名 文学部教授	氏名 有本真紀	印
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ ☐ 社会	個人・共同の別	☐ 個人 ・ 共同 名
研究課題	「考査」に関する言説の変容過程—フーコーの「言説」概念に依拠して—		
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2018年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年 文学研究科教育学専攻 博士課程前期課程2年	氏名 井出大輝	
研究期間	2017 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の目的は、「考査」に関する言説の変容過程の描出を通して、明治期から戦時期までの教育評価の仕方や規準が決定されていく経緯を明らかにすることである。特に本年度は、「考査」がどういった言説変容のなかで制度化されるのかを明らかにすることを目的として、作業してきた。具体的には、第一に、明治期の「考査」に関する言説を、政府や各府県制定の政令や、有名な教育者らによる書籍、教育雑誌の記事から収集し、その整理・分析・考察を行った。第二に、その際行われる「言説分析」とどういったことなのかを、フーコーを参照することで、明示しようとした。そうした作業によって、「考査」の制度化過程における問題を整理した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[考査] [言説] [歴史社会学]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本年度の研究目的は、明治期において、「考査」がどのような言説の変容過程のなかで制度化されていくのかを、教育内容、特に「徳育」との関連において明らかにするということであった。その際、本研究における「言説」とは何かを、フーコーとそれに類する研究を参照して明示するつもりであった。そうした計画の下でなされた研究の成果を、大きく 3 つに分けて示す。

①教育評価に関する制度や議論の歴史を整理することによって、新たな知見を得た点

本年度の調査や史料と先行研究の整理、その分析と考察によって得られたことは 3 つある。以下では、その内容とそこから考えられる現代の教育評価に対する示唆は何であったかを端的に示すことで、成果の報告としたい。

(a)徳育の採用や試験論の変容は、教育の目的・役割の錯綜と関係している。

学期制において、学校設置の目的は学問奨励であり、どの身分・職層の子どもにも有用な知識を教授することが想定されていた。しかし教育令以降は、学校や教師は生徒に対して、そうした知識教授を通じた需要供給関係を取り結ぼうとするだけでなく、秩序維持の観点から生徒を、徳性を涵養すべき対象として扱うこととなる。しかしそうした対比図式は、必ずしも明示されて議論されるわけではなかった。徳性を涵養することは生徒自身にも有用なことでありと主張され、かつ、西洋化に対抗するものとして日本固有の伝統を重んじるべきだという対立図式が持ち込まれることによって、知識教授と道德教育の根本的な目的の対立が見えなくなってしまった。それだけでなく、徳育や体育の観点に立った生徒の心身保護の論理は、国家や社会の論理が先行する徳性の涵養という学校教育の目的を正統化し、国家と個人という二項対立を見えなくさせるどころか、それぞれが本質として同じ方向をむいていると述べることによって対立構図それ自体を解消しているのではないかと指摘した(研究発表 1)。

ここから得られるのは、国家・社会の論理と国民・個人の論理の対立図式は、さまざまな論理によって見えにくくなったり、解消されやすいものだという示唆である。確かに、対立それ自体は解決されるべきものであるが、本研究が捉えたのは、対立図式が解決されたかのように見える状況は、総じて個人の論理を主張しづらい議論の場になりがちであるということであった。したがって、この場合、対立図式が合意形成によって解決されたとみるのは危険である。その際に求められることは、国家・社会の論理と国民・個人の論理はまず明確に分けて考えるべきであること、他の対立図式によってすり替えられる場合に注意すること、国民や個人のうちに想定される本質から問い直す必要があることの 3 点であると考えられる。

(b)試験における応用問題の重視や徳の実践観察の採用は、学校教育固有の困難である。

定期的に口答・筆答で行なわれる「試験」から、平素のできを調査して評点を下すことを主とする「考査」への変容過程のなかで最も重要な変容は、知識の応用や徳の実践を重視するようになったことである。仮説として、それは一斉教授方式や試験官方式の導入が知識教授の形骸化をもたらしたために、応用が重視されるようになったのではないかとということ、また、徳が実践されなければならないと考えられるようになった理由の第一は、この時期に徳育の効果が直ちに発揮される必要があったからではないかということの 2 つが立てられると考えている。ここから、知識教授の形骸化は、そもそもは学校教育が始まってから見出された困難、すなわち教授される場と実践される場をわけるといった観念が生まれたことによって起こる困難なのではないかということ、また徳は実践されなければならない、それを観察しなければならないとするのは、徳育の成果をはかるという以前に、徳育の目的の遂行を徹底させるために考えられたものである、ということなどの示唆が得られるのではないかと見込んでいる。

(c)成績の調査法が口答・筆答試験だけでも平素の成績調査だけでも不適切だと考えられるようになったのは、教育目的の錯綜によってである。

着々と「考査」への道を歩むことになり、その後、第二次小学校令において、試験の成績には平素の成績行状について斟酌がなされるべきと規定された。とはいえ、設時試験の廃止やそれに代わる平素の成績調査の採用という展開は、一筋縄ではいかなかった。結局、平素の成績調査にも、試験のように、日々習っていることを概括して捉えることができるかを試みるができない、などといった欠点が見出され、考査において設時試験は廃止されるものの、口頭試問や筆答試問といった形式は維持されることになるのである。それは、試験から考査への議論の展開と同時に、教育の目的に関する議論が錯綜し、そうした目的を十分に満たすだけの成績調査法がなくなったことによるのではないかという仮説が得られた。

研究成果の概要 つづき

ここから、現代における教育評価論において、さまざまな評価方法が模索されているにもかかわらず、しばしばその不十分さを指摘されてしまうのは、教育評価の客観性や評価方法の教育目的への適応性の確保が難しいという以前に、教育の目的が錯綜していることによるのではないか、という示唆が得られると考えている。

②先行研究における本研究の位置づけをより明確に自覚した点

先行研究を整理する過程で、本研究の位置づけをより明確に自覚した。それは以下の通りである。

まず天野正輝（1993）に代表されるこれまでの教育評価史研究は、歴史から、近代とは何であったかを問い直し、現代の議論を相対化するという観点からの考察がなされず、むしろ現在の教育評価論が目指している方向が、戦前と違っていかに正しいかを強調する部分が多かった。

その一方で天野郁夫（1983）や齋藤利彦（1995）のような社会史と呼びうる立場からの研究は、現代の試験論を相対化して捉えようとした。これらの研究は、当時の「受験地獄」問題など、学校教育と選抜の関係に対する関心の高まりから、明治期において試験が果たすようになった選抜機能について再考するために歴史を振り返っている点で、近代を問い直す重要な先行研究である。しかし、現在の教育論にとっては、そうした社会において試験が果たす機能を再考することだけでなく、本研究が掲げるように、道德教育やその評価の制度化過程を再考することにも重要な意義があると考ええる。

とはいえ、森重雄（1993）が掲げたような、近代教育を大きな物語として捉え、そこで自明視されてきたことを可視化することによってその問題を指摘するといった立場の研究は、徳育の評価実践を含め、教育に関する具体的な議論や実践に踏み込んで分析を行っていくということが、まだあまりなされていないと考えている。

したがって上記の知見は、教育の歴史研究全体において、特に意味をもつものと位置づけることができるのではないかと考えている。

③フーコーの「言説」概念や方法的立場に対する理解を深めた点

本年度は上記の歴史研究と同時に、フーコーの方法論に対する理解を深めた。まず本研究は「言説」に重点をおいた研究であったが、そもそもなぜ言説にこだわらなければならないのかを積極的に明示する必要があったからである。フーコーはなぜ、言説実践と非言説的实践をわけたうえで言説実践を重視するのか、理解していく過程で、言説にこだわる方法論を採用した積極的意義を確認した。他にもフーコーの「権力」や「知」といった独特な意味をもつ言葉についても理解を深めた。

そのうえで、フーコーは実際、どのような研究を行ったのかを再度確認した。特に『監獄の誕生』（1975=1977）のように、人と人の関係を規定する形式を言説実践や非言説実践から描出し、そこにどのような権力がはらまれることになったのかを明らかにしていると整理した。その作業によって、教育評価がどのように行われ、児童と教師の関係を形成することで、権力を生むこととなったかという本研究の目的にとって、フーコーの行っている議論が有意義であることを再確認した。

また、亘明志（1996）や赤川学（1999）が指摘するように、今後の歴史社会学では、フーコーを、権力を説明項とした理論として受容するのではなく、権力を被説明項とした方法論として受容していく必要があることを確認した。なぜなら、権力を超越的なものとして歴史的な事象を扱ってしまうと、現代における見えづらい権力を可視化して、具体的な対処法を考えることができなくなるからである。フーコーの研究は、本来、権力を可視化することで、現代の権力関係を自明のものとしないうような状況をつくるためのものであった。したがって、日本における教育評価はフーコーのいうところの規律・訓練型の権力実践であるとしてそれ以上の分析・考察を試みないことに終始するのではなく、教育評価という実践も具体的な場面でなされるものであり、そうした場面に現われる関係を具体的に記述することで、権力を可視化していく必要があると思われた。したがって本研究も、上記の見方でフーコーを受容し、歴史社会学的な研究を行っていくべきであるという結論に至った。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

なし

②図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

なし

③シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)

なし

④その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

1. 井出大輝、「徳を实践する主体としての児童の成立(の描出に向けて)―明治期における徳育の評価に関する議論の変容過程からの考察―」、科研報告会発表資料(基盤研究(B)課題番号:25285238、研究代表者:北澤毅「学校的社会化の現代的課題に関する総合的研究:<子ども理解>の制度化に着目して」)、2018.3.4、立教大学